

9 10 1 2 3 4 5 6 7 8

30

20

JAPAN

10

1

2

3

4

5

6

7

8



奴夙序

恒書

和名抄 ふ紙寫を師芳之を書 き其此の方言帶
都つゝみ波はまつひうらまつひうら方がかよひと山さん嶺れい山さん
屢羅門りふらもん少すくな禪ぜんびのまんまんきもと孫まご十日じつにち
金昆羅きんくわら山さん五ご婆婆羅ぼばらのまとうとうおんおんまま
ウウアア小こびびつつスス教きょうを引ひててああををううかかまま
ををうう持もししの國くに風俗ふうぞく形ぎやう態たい考かう禪ぜん
不思ふしきひ生うせせるるをを持もたたまま書かくくはは
多たやや川かわああたたののたたけけれれ奴や名な是は居ゐ
てて雲くもののととふふいいややくく

文化十一年文化十一年九月九月をを卒そくむむ西にし音おと七十翁七十翁蜀山人蜀山人

奴師房之目錄

やつあたこ

針ノ称賣

莫う大が勺

即雲う扇扇并小移年

十九日并山猫
全狂歌並蓮華会
全独を扇ノトシ歌

狂歌会の始並櫻所大人弄花集ノ序

木綱、狂歌会

宝合の詫

葉室若多喜

花林抄

礪川

金猫館猫并丸船司涅槃像

富ヶ園并木の井川

後宗の子元

志やちほ

牛門の四友

天狗調在詮集の妓

若年集

入花の妓并本綱墨人画評

物産舎の妓并平賀源内作

和泉矢口の唐

十八羅漢並十八せとけ

茶店の般若面

温純の胡椒舟捨校芸

をうちうす。布天かよ。新富

岳嶺和牛の行程并稻荷の御子

持立子年

若人松現

うめき

伊豫の述懐の狂歌

中飯の羽篋

五つ月

加保信士

畠山先生憶旧の狂歌

以上

聖塗再建並多向

鬼狄頭

東に先生戲作の古

萬載集

狂歌并擅和の妓

茶妓の訓

日本魚譜。鳳山人戲作の古

同文勺の譜

ほくまき程か血のあら

著者名の括弧

圓方

著者名の括弧

著者名の括弧

遠立の宮井三のみや

石のえひす并天原のそ

岳嶺の相敷

中村左右兵の著古

文武丸

品川吉樓の甚矣日并櫻矢

唐多寺のゆきとく

奴^なた^ま

三^ミ九

奴^な師

勞^ノ之



や^ハ黒^ハた^シを^シ或^ハた^シの形^ハと^リて足^ハ尻^ハ底^ハ志^ハを^シも
を^シ是^ハ安^シ承^シの始^シり^ト也^シ弟^ハ其^ハ比^シ木^室卯^ニ雲^{二種事^ニ}
后白螺殻改

發^ハ句^ト 丙^未年^ハ卯^ニ也^シた^シ自^シ孤^ニ天^ハ不^シやつ^シた^シと

夏^ハ比^シ枝^ハ豆^ハを^シ何^シ形^ハと^リ空^ハ少^シ明^シ和^シキ^シ稱^シ三^ツ月^ニす
葉^ハ少^シ新^シ也^シ弟^ハ時^ハ形^ハ誰^シ少^シ句^ト
名^ハ取^シ夏^ハ牛^ハ少^シ古^シみ^シう^シ

椿^シ新^シ先生

内山^ハ所^シ在^シ歌^ス

大^シ樹^ハ何^シ石^ハ少^シ古^シ十^シた^シか^シ也^シ

形^ハ少^シ中^ハ何^シ少^シ古^シ也^シ

古^シ也^シ之^シ少^シ中^ハ何^シ少^シ古^シ也^シ降^シ川^ハ底^ハ少^シ丈^ハ少^シ尔^ハ
十九年^ハ丁^酉也^シ弟^ハ少^シ中^ハ何^シ少^シ古^シ也^シ朱^シ樂^シ落^シ江^ニ山^峰著^シ
不^シ大^シ抵^シ中^ハ貨^シ少^シ中^ハ少^シ古^シ也^シ是^シ牛^ハ少^シ古^シ也^シ室^ハ錄^シ形^ス

針うねり

明和の春をまた針綱称^{シテ}て天皇文升^{アシキ}御也よりひて同年牛
立臺灣^{タマニ}、老父^{シロ}乃^ハ居^リ時牛は止^ム所^ハ此色^ハ舟
才^ハ有^ス事^ハ、夙夜^ハ老父^{シロ}隱密^{シテ}モ^ハ生^ス強^シて
居^リ中^ニと百^ツの矢^ヲ射^シ中^リ。

十九日
馬席省事をナカヨリビテ年上志体。自十九日
之其手云者傳々山猫モニ。倡婦トシテ之を云ひ出セ
山猫

萬葉大義

集序者事を十九日より二十日止ま候。每自十九日
之甚手書考傳の山猫もつて倡婦行ひて此處をつひ出せ
隠居せつ事す。大がく事れ十九日生つ字体を近き故にして
明和九年壬辰二月十九日の大虫。時通名曰太翁號多喜
云能得宗直何。鶴雪牛糞盛者。時文彦玉多稿を尋せ
葉鏗自陽を入れて以靜ふ云うきゆ川と名居要厚幸
虎の行車文彦玉を主す。おき聲有りて火の爲め洞來久人を
中を走る。物の首部をみる。是の今まうきゆ川と名居をもて
りや形や其聲の

100

徳をもつてゐる者を仰うるが
事よりよき所なり。時丸薦多清山廣の名前にて所詮之を
ものと仰せられて圓ノ陶を左席へ來りて
高き名を冠ひて坐す四方に己を以てあり。也すともまことに氣
を以て方往來を務めゆく若處殊の要津寺の毎月蓮華会
をうなぎ入を行ふ。招く由て行ふ一席皆其圓形の如きも見ゆ
少蓮社の禁をゆすて圓名を改めんたり。也
木室七左衛門和名彦右衛門即ち慶元丙徒自付と定享辛未八月十
九日歿す。

名月やうすと白星之間のあくび
さくを歟せり若き度すりて不惑せり
善徳亦おろか一才せば所歎也後年様頗るせん時
手もれぬ事年寄お手相承者所多般うち能審ふぞ柳

御歌
御歌
御歌
御歌

金瓶を取る

おふまうまで歌全一多の時仰雲たちふ事多きとて今
白きよきの天氣と雨聲合ひ形もゆき潤すれりあさかな秋
立つ筆もて書つてやうやう發行
あそくうて日うちをつくす柿うね
おもづけ西野山の山中入てあそくまかううを歌も
か雲久くも小善種他方を詠一時享和を歌わせあくは
れのをゑく歌のあき我がれり音のひくすくさうなもの
御歌執政より前半ふきをえりやうやく度敷寄の歌をな
御歌の在歌を集一ものと今自の歌集をつよ其年
行つとくらむふね柿つきたゞ一時
きらら夜歌と楓歌と名を以てぬきのねうせりやき唐ねこせは
歌の力うち歌のやうさく歌

やうやうせれ往か妙歌

狂歌會の始

狂歌會の会とてよしのを始てせり四谷忍茶樓所の狂歌
小島橋原之助也称す田舎翁のや人田舎翁のや人其時命をうらびふ四丈人太根
太木山田至平名也称す所人辻番屋原と食田所
往金座牛野下野守也称す東作内藤承翁也称す稻多稻多也称す四方考官等トキタ
考人トキタ大根大根也称す人全人全也称す市人マツ腰脚小
竹竹也称す切たへふ脚月脚月也称すも元せらひをうそとを思ふゆくはく方角
表立立也称すをつらもの少く至橋北側を所の陽陽也称す是是也称すの本弱
事事也称すと改妻改妻也称すと狂歌をたゞして脅脅也称す多内内也称すつゝおゆ
しと橋橋也称す唐衣唐衣也称すを冠冠也称す橋歌先多歌

神神也称す浪浪也称すに充鷺充鷺也称すかふり斗歌斗歌也称す楚入楚入也称す底形底形也称す不穀
髮髮也称す和奇和奇也称すを駕駕也称す先多小字小字也称すはたぢちかくかくと戯戯也称す
う舞舞也称す志志也称すを移移也称すと着着也称す風風也称す唐歌唐歌也称すたゞ暁暁也称す月月也称す高

橋洲序文

方舟に出て、宿の圓形をもてて後邊白玉翁の法乘那婆をもたらす
おまつあらてにゆきをかねむ半侍へ牛の所期裏筋をひく
ふさわしと

今やまくは雲の下草ひきと見て、自まさばりの生まむをうそ
せ種うて先をみ見せ侍へ。かくと虎宿のものあくとゆく
狂詠の起をほくとぼくと。章々えう。三十年ほあくとも
うそくう共比方かほる人ちづふ二人三人まで自ら御事
うちもよ席ひひて莫連の媒う侍へ。四方走らばる。
詩をかくと。かくとおほうを狂歌の時へ響かうじてども歌
うとおまうおとつまひを歌ふ。もとよのよ和をもとれ
我とぞおれとお入せんを大根を木てるものとおひ
弟うぢ木まくお細智急の子をそとあひ奉れ。平狂東作
院色黒人形で歌をもてひ川まくうニセをくわうとて朱紫

漢にまと入焉る是又智郎先まつやうと和音を弔ひ若狭と和
歌の力を狂詠おりづく秀才の人にあり。而らもよひ
おうじと尾づとひて狂詠や。やくおもうんまよあらもと
うう高名の後深やうて其徒を東ふひくき苦に北ふ越
すがみ南をはだちとし又わう歌う所ふおりてまじふ狂詠
狂詠上せ。うす筆歌飯盛金持者。輩つて坐たう坐を
在詠西天王を稱せ。飴盛と吉行うて師をせと先者と高
く喜泉と安をめぐる金持。其聲よりうて師を雪くせられ
歌ひゆう四方歌極を歌ひうて多都が跋扈。國事盛ん
形う御ふる鞋大王と又一の豪傑形うて加多つまつて名
だらう御ふる御多ふ市人玉に。三陀羅をちくえうと枚筆
坐まふつまうづれつて左陽、上毛、駿、お、奥、羽、信房、
常、郊う。其のふこのまき人目を追ひ月を刻て盡る

那ノ事ノ如ヒトモアリトモニシテ、室あら芳ナリ。トモキル
御ス、居上リテ能クサル也。又身を退ム従カニ、於クニミツ牛尾
陽ミテ、御内事ナリ。御、指揮を司ル者也。是モ、雪
丸、田勘丸、玉浦、全成也。若肩又、諸衆才士也。尼をば、
ふ、多能能者也。比东都。諸大人の餘の物、汗中多也。尾
陽を甲子ノ年、駿川吉川、尾間、今治、三井、尾具、
久計、那古、安原、御、とお生、北草、モウ少々、今度玉浦翁、仰
てん、御社、と四方の彷彿の御、をちひ弄元、集々、行
き事、少々、モチモチ、おうつるも、少々、御、蟹、又、之能
を、手、つみ、其、華、と辟非、鹿、まち、ある事、
ナキ、鶴、鶴、大人の序、又、弄元集、之、之、不、就、其、左、

天明三年癸卯正月吉旦
新舊年移晷序移空賜勅方之布乃大狂言

木納狂歌会

久々をせし所集り者三千余人うちも膳所御宿押針全也
又宿す方納す。やづり一庵（後ふ静庵）若時より着到也が
り、自筆（アシテ）にて記す。の事は家がよきとも（アハサニ事）
朱染若戸市名大鷲所生先りと力こもる内山先生家
学びひそゆ能をよし人をちく先の名と景常墓（カケモト）モト
墓石より詩をとて日景賀多改毛春山先生年忌より
内山先生も出る。古寺鐘

形を廓の國よりされざるがゆうかと秋を擅むる
もすみを先きに鑑みて聲を失ひ其時は少く
せぎたる聲よりも形立たずとしゆゝ口蓋を留め居はん能く
を覺えども故皆人費氣乞ひをうけと若きを害むと
牛比若ての名得て何と云ひもれやと嘆息を改めり日光の臺
を過ぐるをせりひそめりあすと若く云ひて之を仰せらば

廿二
和歌

狂名のうち

宝合

孟宗竹

又まことに吉田と芳村をもつて是が「朱鷺等」二字をめあた事
為ゆれば我やまでもう人間かくに以勵る行程の往く我よ
「御事」也あらびく芳村之事を始む生
市名左内故の居を畠田内酒をたゞ一面高き男さき在
居を酒上熟達康きくゆゑ承三年宝令をとて威を形て在又を
すがてゆき牛と原角唐若寺は裡義より仰ぐ時此多院
をめりて宝令を形せし時此持不宝わざふれをもつて其先
寺ふきよひりん皆人きよる宝わざ思ひてくやく寶わせよ
行ふわざもかく行わざとてくわくしゆく行わざとてくわく
一巻市名左内故富國を新多喜新南堂と云
舊多喜を安雅右乃タケツエ世ノ音
文之文之故ゆきく形其ゆき天承三年秋多喜草行
有音移を以て内をもつて宝令を形せし年三卷行
ひち差切一ゆきく事無升至て走之有大名保山多喜

内山先生之書也
事々内山先生之書也
其後麻布本の板も亦
を乞ひ河合義亭
がくらうて吟山^上の内山根
を立ちあがり下りて
さかだちの太刀席^下の四名の内
がくらうて麻布本の
袖有原^上を乞ひ一
せ袖有原^下を乞ひ
其後麻布の裏^上
岸立本^下を大口保百人^上速水透^下
當つて河合義亭^上を
河合義亭^下

明和元比四月某日某事老多齋中植木也
山生多子森具自形也之形にて見る所也
之以形者多也其多也内也

伊至廟之周年者

樹立年月
嘉永元年九月
享保廿九年九月

き取多三面面向云三、唐松さすあく葉のち草紙是れ草木
しつちゆきさんみえを往多處にせ錦抄てりもとし草紙抄

移て松木をまく紙く花をす御す内をうち生じ取ざる植木うち

一木河りは是もとくみをひつてや
花林抄

花林抄外、其生花林抄すむら廣くじゅす斗事へもと陽成房

福壽子

花林抄のまく見せつて半身をみてあそひうき

碑川

福壽子八五子う坐一種ぐりきわら草紙の松木を跡事ゆき
山事巧く此云手り碑田子と通す

富岡

獨立年あ修ふ草紙の古文書す石川を碑川と呼す侍

碑川

人ふ碑のまく見せつて形多面

金猫銀猫

深川八幡を富岡國せすりカ川一カ國形多面一見す

九郎院

布引川岸無すて室町より左久吉巧て龜下川竹と名砂子

九郎院

子尾毛川岸無すて右下ふねに

九郎院櫻

天明庚午西行橋の東圓院家萬聖山寺徳寺隱臺考行金

九郎院櫻

孝行を金猫と云ひ或未を銀猫と云ひ其比川柳馬と名

九郎院

九郎院をかゝり銀船の猫も見え

度宗

吉子句行ひまく一席の車福寺の簡代の九郎院櫻

度宗

像をまくさせ一帯のふまことくいれをりすを下

聖堂再建

猫巧モ書一きく一の文和三年乙丑の冬居端すかん
りくらすまくうて見

度宗

今聞性空席間禪師の事年元享就古五萬山名の真蹟

聖堂再建

の卷物あせし行ひ度宗の五郎の像不度宗の五郎は中じ
かく煙山の無準ふ不を拂ううひ形を度宗の五郎を多々

實政の年聖堂再建行ひ諸僧以弟の家の歸家を拂ひれ

聖堂の用ひ度宗の時家内附の句

將つよ弟ノれ子を死を生

又考うち公家原の考の唐玉の実事一社

鬼狄頭

聖堂の子の像を神田守御
射せよとあわせにあてておもひ
まつて形をば徳うやくせんとおもひゆ
まつて城門の唐橋より騎^{オニカハラ}吻^{マサニギ}、^{マサニギ}林^{マツ}の上ふ向ひまつて
たる古廟殿の下の林^{マツ}鬼林^{ヤクイ}野^ヤと而てたる所事の人はまつ
多^{タチ}をひやうてあやちに去り遠ひてかきを向ひたるゆゑとまつ
トおまんの人の手を差ひて骨の肉^ト背中合せ^テと腰^{ヒダ}をまつ
らをむく身^トゆりとまつ
元氣の聖堂^トや若強^{アサキ}うて走^ト、穿^ト政^{マサニギ}の作事^トと仰^{マツシ}まつ
れ^トともやや雲霞^{クモハス}不^ト林^{マツ}梁^{リヤウ}を勧^{アシタス}め^ト守^ム村^{ムラ}七^{ナナ}也^トとす^ト年^ト
元氣の聖堂^ト圓井家^{カネイ}の作事^ト奉^{マツシ}め^ト方^{カタ}廟^{ミヤ}馬^マた割^{ハサフ}の馬^マと云
ひと持^{マツシ}め^ト其^ノ館^{カニ}鬼林^{ヤクイ}野^ヤと鬼林^{ヤクイ}頭^ト腰^{ヒダ}と云^トし
有^リ鬼林^{ヤクイ}野^ヤとまつ鬼林^{ヤクイ}頭^ト腰^{ヒダ}ナガリ^ト猫^トナニモ

牛門四友

東山先生

詩君斜曲背白馬橫推車已及戰場逃歸國部家
東山先生之子塙也號稱括父時門人多慕之於
之金多之次第圖部以修其之多者多而多之多
向氏甚好十餘人形貌如古君子全之多作之多而
極下

吉京大全

黒素六帖

青樓の事を志す。黒素六帖を之に中を著し玉音院の
院乃ち其處の事より端原並が向へる處に近いと云ひふるを
第載狂歌集の所集にてつら其のとめておそれり

在歌集の始

萬義集總和歌集序に載集の序を左に移すが此集の後
玄政年、板と易軒作すと云ふ唐衣楊が若葉集を撰む
若のう牛糞草は故張馬鹿集本居宣長作是を狂歌の
一先づて若のう集形とし歌をもつて

万葉集跋

萬葉集の跋。楊の八衢千葉の名自其年この集行ふ
名の標のハ衢の跋をのむきて不仲を行ふ我家の其跋行
李を本居あや

若葉集序

冬之集年小楊柳千葉の名内山先生も子の隠居アキラキ置木行
室を先ま

在石始
摺物始
入花始

酒よ上熟森。狂石のうだりて大根を木狂歌の歳旦摺物を次
形う文うも生まうせゆれ。木羽若に楊柳の花の人の隠り形
をそそがねば

木乃ひゆうきと男うて生うをかきたる何をさどく芦屋庄主をも
すき物を扇て臂の腰に包み。和を背腹て何をう其比年
芝三丁月を三月を半身漏とて初利便。其を耳と深え吉
き石被を扇ひ。包みくわすうたる男の狂石を階の隠人。而
人皆驚きの事人を何と石せ。其狂石の意を半身ふまうて
生を折紙をえを入祝まつて。今お桂寿の志願を充時。の狭
方ゆきの至れをつぶん陽うきだらやうと真人の文豪を仰ぎ奉り
一叶多好。まつて

トヨマノ訓
今ノ名物古帖アリエカ
姓ノ字古寫アリエカ

東涯先生の名和古帖。其處の字をトヨマノノデヨモ訓せ
平賀源氏名田倫字士昇風氣の見て第して曰た。トヨマニシテ有

を先生の訓教ふ所を言ひ

平賀源内ハ讀政の人ミ官元ハ行う年ハ年を行ハ日本中出ハ
学校ハ遠ハ也男ハりて生ハて來ハる。宝慶モ市モ風俗モを之ハ其事
の行ハれハきハと志ハめハ性ハ貨物ハ產ハを好ハく。故ハ用村元雄松上山少シ主シ物
亮モ事ハを講究ハ。物產ハ今ハ形ハす。九月產房ハ宝慶七年丁丑因
有シ旅ハ去ハ。至ハ之ハ所ハ陽モ爲ハ之ハ與ハ行ハ理ハ。年ハ代シ實又君因ハ不ハ幸シ同
九年四月平賀氏陽モ令ハ。三十年庚辰ハ因ハ。布衣全
三十年壬午平賀氏又陽モ令ハ。三十年庚辰ハ因ハ。布衣全
辛未モ。帝ハ之ハ雅ハへ東方モ之ハ之ハ。家業ハ生ハれ三十余年。物產
子ハ多程モの内ハ古シ小シたシと擇シ。子ハ多。物類品ハ篤シ。辰
年宝慶十三年登シ。有シ蓄財。躰素鵠モ。物產今ハ是處
那ハ乃シ。

平賀源内名圃倫士尋旭堂先生狂石鳳來丈又号

天皇皇后大賀の志度浦の人と宝曆の末始て戸内市郷聖臺を寓居した。安政四年村方雄也も小あまの学をつまむ中院布を序すて所勤定奉行をもあひて守りつゝて公家獻り。嘗て入る佐用に裡所の舊宅修生又及三十布私道す。つゝ又移京御京萬葉の田家を移す。松波門主修。馬倉所の田家等。是下り光明和七年唐尼。比七處。五通。是下り光明和七年唐尼。比七處。五通。
詠。雄。幸。右。う。家。を。互。生。ア。蘭。院。布。多。を。モ。承。ヒ。卫。レ。キ。テ。ル。セ。イ
リ。テ。ト。互。つ。ヘ。ス。高。若。今。身。少。そ。テ。を。送。事。を。と。ま。ひ。以。て。か。つ
考。多。考。字。を。形。す。或。伽。羅。の。梯。銀。力。称。名。牙。齒。を。く。く。り。或。之。余。
ら。革。茅。を。つ。く。り。て。草。ふ。声。乞。れ。布。永。八。年。で。キ。十。有。六。日。あ。病。在
寝。け。て。人。を。殺。死。ま。所。不。知。人。を。樹。木。が。廻。門。人。を。樹。木。同。十。月。九。日。病。死。樹
木。而。死。屍。を。被。弔。某。小。ゆ。接。鶴。後。泉。寺。を。左。手。に。葬。其。友。於。因。多。伯。私。歿。を。以。て。墓。碑。を。建。て。表。其。墓。表。小。

智鑑靈雄居士
○○○
致

見れり一語不善ふべからずを抑

日本魚譜

佛禪師の作小説海の事もつて書ゆる事より是に
吉田本屋種足原つてあて阿蘭陀人貯財す何魚は國の名聲
句何彼人形仰とぞき解事もおもひや
姑宮うづま風氣山人又天皇唐人を事に在文を事
事者多御供を付見えます明和のちある其の名根那
編放屁論今後編瘡陰隠匿所里のをと巻かんと嘗て行
天狗體體堅定猿起草根樹の糸、茅をすと皆不遇す

辰山人集

直當終之

全文勺口詳

召來作禮を果てせよ。又称其臺をも今より通を尋ね。未だ度
し難い。すれども是が事は、少しおきに、うじて終せ。時直下ふ革をと拂ひそ
て、左の邊をせざるゝ爲まで其上モカへ立ちて階をの廣くお著めり
て、事とろとさすらああ作とも称嘆せ」と。
義士
鳳采淳モリタケル、布の名、福内鬼がれ移生年は名文の志屋鬼モリタケル也
矣於は天系通せり。仰まつてみんべくして處々ウムニシテ、又
名を自鬱せり。肺附モリタケル。ちやや磁石の針粹モリタケル。一核不迷ふりよ
まよひをもつて名へ。例の物數品以驚モリタケル。余方つまくゆきを曰辭。

十八羅漢

十七四羅漢々宝雲徑而とお見えたれも萬壁の十八四羅漢々
一ノ賓野處をもアセラニ多者ハ同せん和異せんや
す若御事はあふ見えたり日本少モ才吉角^{サヤ}
十八もとぞアキシテナ方ナ十八の義づれやしかりよみや也

卷之三

卷之二

わくよの邊に者、姫ゆゑまつすお氣より事あら事御多々。
肩並み、並んでお氣をもててお会い
り得る事あらむ。故お氣をもててお会い
り得る事あらむ。又處かの事をなんぞ
七丑年より年より和年より年より
ひきふ神ヒキフミトモサシテ、御體行。

ナニ娘モヤセテハア、ちんぢん小
ヤアセテヨリ出ル。
甚だソム、まとけぐをえタリ。サ
ウアヒシテ、シカモテキ
苦
サ

赤
1926年

木齋道年
の聲魂
の障子
五年
暮年

遠近文

杜荀禱者也。而近宮之有
鶴者，多所知也。

古文書

卷之三

漫
魚鱗小酌
毒形空閨
東山之水
不勝其端
浦上之風

を郎官房にて行方て嘗ふしとあまを走行す事多矣
あまをさかて考るをナシ

呉端柑橘

呉端ハ暖色をもてて相熟づり。橙碧也。九年母嘆云行之
ナシ。豊後梅尔皇形也。大形。蜜柑相味ナシ。

卯酉速傳

在前

安永三年甲午年四月十日或日記

宮内御殿郡奉行

日録少佐御門

唐裏ゆき畜之頭

真方十年次跡

右被添付旨於近松革部左緑頬老卒列置右近將
監串脣之
其時小善種不布室處大手の多雲路後を駆ひく叶クす
之を速傳の在詔行。今日ちうれ此日記をもて此時之事記

至多志也八月廿九

右飛げあくあきもたせ種のよけとせんてへり少た事の
元飴田所牛板屋次第百尾をて居を所
者馬を奴えて西川被傳ふから馬やま魚をしはくもく幸
免あやう持の自ら経名を看魚板乃す御く。肉膚屬、
ぬと先を具、かくとも獨り立て。而一吹のやう多小
かく事し。卯酉の鹿の子餓也。次セリ。百尾く間上

キヤニキチト行山行。若後少年おひだり。牛形
小松百尾。差を時元飴田所不外の羽織を御半身に舊持院の弟
ウカナナラ。之を着たうとして山内を走る事無也。今まつ形

縣まき舊店也。羽織もご多の何多算也。

文武丸をつる在案小松原被傳之者人多大体被傳古方

文武丸

小松原

麻生餅

間上

より御へ委する事、極下をうやうやく功能を以てゐる

五荷棒

安政六年丙申日光
號社參うる時道半中ノ一
穀幕子ヲ
五荷棒をつらひて、若比穀幕子不達磨種子の御學一
口味や如きをもつて、三間梁の餘をうき對之と思ひ
今年庚辰行々友の主をめぐれ、或ひ君頃北株又うゆの草子
さて五荷棒をつらひて、貯金をそろそろまわして、
大工の其役もまとめて、若無歸鄙鄙
形れや四十年。昔よりすれ味ふぞ、若比、千歳、おえ
から千葉子形、穀幕子の牛糞と栗種をつらひて、舟保青
毛と京きり入らぬたよ、と云ふ。

昔歎慕子達摩種子承道半陽日光穀又長傳
五荷棒大飯猶唱三間梁
多屋耕彦や船橋莊吉五十九

品川勘定日

品川よ飯賣女ノ價葉をばうる甚定、歲暮之事多れ、毎年正
月十日より御室形、小銭を十文を壹疋又七文五斗を七百
五拾文を定免て西脇や三郎の形を壹疋形、下を何せやら
んが、西脇の一家はもくろんせしを三郎のものむづくと云
て車の種少額を逋され、然れども古通を天下の大店能
く逋生まゝきせしつひうどいた青様不啻うそと禁せし
をつりて、右の車をさへ、三郎より久世先を聞て居り、
大晦日お比較もゆく會式を駆ひやる形を寫す。安政四年
正月十日品川勘定日記、
本宿舟宿半身もく様天成代名支那斗も千八百尋、立意者社門前が所方支那斗
何れと取扱い

品川櫻井

新吉京京都、七丈屋、布多處、狂石をば某元感と不盡

加保信士

曹司谷勘定日

庚午年十二月

和風の房をつゝ隠居の娘をお宿内所で梅を一才せた内小室在
詔令何より時持佛堂を乞ふ先の布多處う伝牒ゆく新佛母
加保信士某から一ときもかうきぬ御多幸は山厚く仰す時日ばかり
やさしく風を拂ひゆるあまく娘の爲め弟が用ひ産婆をつて次
て此京所へ出で我皆人かばすやと異居せしむれをし童の
謡ふるよとよとよと背をきくと様子が形くとおれ自ら
おとくを歌ひ人を笑わせりやあん室唐の物うじまと

さうと鐘う享保十九寅ね

様ふし出づるを底形きう川和

山口を七事内

やうて
を無

洞房詔圖

元文三戊午夜

イワナドリ一時とあゆみに様の前

ほまくの半ぶ此こより聲のをもて應接する所で僅に予砌は不待
耳年暮を無きて様樹を多く植て宣ふまをまち齋之也

舊嘗
岩本鑿井別
是

又洞房詔圖元文三戊午夜庚午寺蘭屋の房圖下待一年様を植て
一草木を立たず應接の嵐且轉の序を述べ山竹千株生
えたる様の松古木が植ゑられを度すたまを林山竹
うち木の下簷ふよきむけとうたう甚若ふく心の花司りや希モテ
も行うやうて照

隠り思ふ老病はやみたゞて取て笑ふ一きものうけうと
家内はもとよりあきらめこられてよく云ひあるもの那已此四年多
代寫きをもととて十八日登高堂を度せばと音符寫りもうつま
きをうづび一後もづき十月上旬を叶ふとまの轟然たる
つゝてとも何ぞれ周のまこと膳ふらきのみみて微醺トニヤウ坐ら
そあ事かうせ退席して面白うづれ聲色の樂まし形くた
殊々ともて身をもとめずもんとひ珍重しきと
何きなまき多聞のうと少御く眠う一夕地を押たゞ娘

里山先を嘗め
文部へ往く

文化六年四月
九日癸卯年七十五
千白山本念寺清芳
杏花園に逸林休
居士

主事の通ひて案を世を重んじてたゞすとく形うき
形うきへも宣や居ともあらむをほんく一也見一年
つまむを意へ

主事南朝翁乃ちつとおあかねへ主稿にておの市文宣堂
もつるものにたれまくとゆう形くおおはく所爲
乞形うてうづみる人せひふうひ多ふつるもぐことて
ゆづりうづくやきとをりしもとさく一也此
友多も某ふうつとくをとつとく補訂りて
ふるむむとすをとえあきな

侍賈堂主人識

